

## ソ連人の魯迅論

(IV ペトロフ)

川上久寿

## 偉大な中国人民の作家魯迅

中国の民族文化の宝のうち、いちばん名誉ある地位をしめているもののひとつは、偉大な作家、愛国者、すぐれた革命家、ヒューマニスト魯迅の作品である。魯迅は現代中国文学の創始者である、中国の現実を偽りなく多面的にえがいた作品、それにより、かれは中国のリアリズム芸術にあたらしい時代をきりひらいた。魯迅の文化遺産は大きい、これは20世紀はじめの中国社会生活の百科辞典であり、中国人民の知慧の肉づけであり、あかるい将来にたいする中国人民の期待をあらわしている。

魯迅の作品は反封建・反帝国主義の中国人民の民族解放斗争の時期に発展した。きびしい革命斗争の時代に、魯迅は中国新文化の旗をかかげておそれるところなかった。

《魯迅は中国の文化革命の舵手であった——と毛沢東同志はかいている——魯迅の骨はかたく、ちっとも奴隷根性や屈従のかげがない、これこそ植民地・半植民地国家の人間にはいちばんとうといものである。魯迅は人民の大多数を代表し、文化の戦線で敵の陣地を強襲した、もっとも申分ない、もっとも剛毅果敢な、もっとも断乎とした、もっとも忠実な、もっとも燃えるような、ほかに例のない民族の英雄であった。魯迅の方向はあたらしい中国人民の文化の方向である。<sup>(1)</sup>》

自由と人間の智慧の勝利のためたたかった戦士魯迅の思想的・作品的成長

(1) 毛沢東選集、第3巻、1953年、256頁

は、中国における人民革命の発展とはきりはなせない。魯迅は自由で民主的な中国をたたかいとるために、全生涯とおおいなる才能をささげた。

## 1

魯迅は1881年9月25日、浙江省紹興のふるびた町にうまれた。かれの父はふるい型の知識人であったが、国の役人にはならなかった。母は農家の生れであった。作家の本名は周樹人である。魯迅という文学上のペンネームは母の姓魯をとったもので、これをつかいはじめたのは1918年からである。

父には4, 50 畝の土地があったので、家族の生活にはことかかなかった。魯迅は6才から私塾で読み書きをならいはじめたが、その塾というのは、昔からのしきたりで、古典を暗記するというしくみになっていた。ずばぬけた明敏さと並はずれてするどい記憶力で、かれの学業はりっぱだった。農村生活にしたしんだことは、魯迅の育成におおきく影響した。母の血筋関係から、かれは農民とつきあい、民間の伝説や物語、年画、それに村芝居などがすきになった。魯迅の小説、《故郷》と《村芝居》は、子供の頃をおもいおこしたものであるが、これは農民にたいする真心からの同情とふかいリリズムでつらぬかれている。

1893年、魯迅の家に不幸がおきた、それは北京で官途についていた祖父がとらえられたことである。この事件とほとんど同時に、父もおもい病気になり、家のくらしむきはわるくなった。魯迅は田舎の親戚のところへやられたが、まもなく、卑め羞ずかしめられるのにたえきれず、家へもどった。その子供時代をおもいだして、魯迅はかいている。

《4年あまりも、わたくしはほとんど毎日のように、質屋と薬屋にかよわねばならなかった。いくつの時だったか忘れたが、薬屋の帳場の高さはわたくしの頸ぐらいまであり、質屋のはせいの倍もあった。あざ笑いや蔑みをうけながら、着物、宝石などのかわりに金をうけとり、それから病気の父のために薬屋へはしった…》

3年後、魯迅が16才のとき父は死んだ。その年に家はとうとう落ちぶれて

しまった。その頃の中国で教育をうけた青年がとったふたつの道として、役人か商人があったが、それになりたくなかった魯迅は母が工面してくれた8円をもって、南京へ勉強にでた。

1898年の春、かれは江南水師学堂の官費学生として入学し、その後路鑛学堂に転学した。かれは技術のほうはあまりこのまなかつたが、それでも成績は一番だった。自由な時間には中国の古典小説をよんだ。そのころ知名の嚴復が訳したハックスレーの本によって、魯迅はダーウィンの進化論をしった。1898年の《百日》改革運動（戊戌変法）と1900年の義和団の反帝国主義暴動という国内の政治事件は、かれの愛国思想に影響をあたえた。

路鑛学堂を卒業すると、優秀なかれは1902年に、専門の技術教育をうけるために日本へ留学させられ、東京の大学に入る準備をはじめたが、のちになって、祖国につかえるという崇高なかんがえから新らしい職業をえらび医者になることにした。1904年、魯迅は東京から仙台へゆき、医学専門学校に入学した。しかし、医学も魯迅の将来の道をきめることができず、ますます中国社会のいちばん大切な問題をかんがえはじめた。かれが医学をすてる機縁となったのは、あるとき幻灯をみたからで、それによって、病気で死ぬことよりも無智とたちおくれのほうが、中国のわざわいであるという考えになったのである。中国でなによりも必要なのは人民の精神的解放である、そう悟ると、《第一に必要なのは人民を精神的によみがえらせることであり、それにいい方法は文学である…》とかんがえた。

魯迅は医学専門学校をやめて1906年東京へもどり、文学の研究と文学運動にうちこむことにした。このときからかれの生活は、中国人民の精神的解放をかちとるための、愛国的なたたかいにしっかとむすびついた。

日本での魯迅は清朝を倒し、改良的方法で国をあらたにしようとしていた。《光復会》のうちのブルジョア改良主義者としたしくなると、1908年にこの結社にはいった。この結社にはいっていた有名な学者の章太炎の指導をうけて、魯迅は《説文》を研究した。日本での生活体験は、のちに魯迅が文学活動をしたときそのささえとなり、革命的・民主的思想を形成する時代となった。魯迅

は西欧の文学をよくしっていた。かれじしんがみとめているように、たたかいをよびかける作品をもとめて、れは東欧の作家にしたしんだ。かれがよんだのは、プーシキン、コロレンコ、ゴーゴリ、チェホフであり、ポーランドの作家では、シェンケヴィチ、ハンガリイではペテフィ、チェッコではイエナ・ネルダであった。日本語を完全に学んだ魯迅は、すぐれたリアリスト夏目漱石やそのほかあたらしい時代の日本作家の作品をしるようになった。

魯迅がはじめて文壇にでたのは1903年で、そのときかれは雑誌《浙江潮》に協力しはじめていた。この雑誌は在日中国人留学生が発行していた。魯迅は最初の論文で、西欧のブルジョア的な政治・社会の原理、ダーウィンの進化論、西欧哲学、現代ヨーロッパ美学の成果を紹介しようとした。そのころはもう、自由を愛する愛国思想の戦士であり、唯物論者であった（《スパルタの魂》、《文化偏至論》、《人間の歴史》をみよ）。

魯迅が若いときかいたもののうち、とくに注意しなければならないのは、《摩羅詩力説》（1907年）であって、これも留学生が日本でだしていた《河南》雑誌にのった。個性の圧迫にたいする抗議の思想につらぬかれている、ヨーロッパのロマンチックな詩の、革命的傾向性を分析した魯迅は、悲しみをこめてかいている。当時の中国には人民に愛国心、自由愛好の精神をめざめさせることのできるような文学がなかった、と。

《こんにち、中国じゆうをさがしてみても、精神生活の領域で戦士をみいだせるだろうか？われわれを美しく頑強にしてくれる真実のこえはないのか？餓えと寒さの苦しみからわれわれを救いだしてくれる熱烈なよびかけはきけないものだろうか？》

《摩羅詩力説》の意義は、それがたたかいをよびかける文学をたたえたということばかりで偉大なのではない。かれははじめてロシア古典詩の巨匠たち——プーシキンとレールモントフ——の作品を中国の読者に紹介し、バイロンの主人公にたいする熱中からリアリズムへの道をさししめした。魯迅はゴーゴリとコロレンコの芸術的才能をたかく評価した。ロシアの作家たちにひかれたかれは、19世紀のロシア文学がヨーロッパ人を《その美しさと偉大さでおどろ

かせている》といった。

1909年魯迅は故国にかえって、杭州の師範学校で化学と生理学の先生になり、その紹興中学校に移って、1911年の革命後、校長になった。

魯迅は辛亥革命に、これまでの中国の歴史になかったあたらしい時代をみて、おおくのものを期待した。しかし、清朝は人民の勇敢なたたかいによって、うちたおされはしたが、封建的・帝国主義的圧迫から人民を解放できなかった。中国が生まれかわるという期待はずれてしまった。国の権力は反動から反動の手に入ったにすぎない。魯迅は辛亥革命を熱狂的にむかえたが、しだいにその結果には失望していった。

《わたくしはみた、辛亥革命を、第2革命<sup>(1)</sup>を、袁世凱の皇帝即位宣言を、張勳の復辟運動を。こうして、わたくしは疑わしくなり、しまいには幻滅を感じて絶望してしまった。》

1912年魯迅はまねかれて教育部部員になった、1920年からは、有名な北京大学、北京師範大学、北京女子師範大学で中国文学史を講義しはじめ、その12年間ほとんど北京にいた。

日本からかえって、1909年から1917年のあいだ、魯迅は古代・中世の中国文学史を研究し、墓誌拓本の蒐集、研究にしたがい、《会稽郡故書雜集》を編集・校訂した。そのほかの本では、魏のすぐれた愛国詩人嵇康の文集を校訂した。そのほか魯迅は仏教經典もよく研究した。中国文学史を自家薬籠中のものとしていたことは、文献学者としての魯迅を博学にしたばかりでなく、その創作活動にひじょうに好都合であった。創作をはじめたとき、魯迅は過去の芸術家たちのゆたかな経験をわがものとしていたのである。魯迅はまた翻訳もした。1909年にはかれの編集で《域外小説集》ができたが、このなかのガルソンとアンドレーエフは、かれがドイツ語と日本語から訳したものである。

(1) 帝国主義者、反革命的ブルジョアと地主をうしろだてにした袁世凱大總統にたいし、孫文の袁世凱討伐のよびごえにこたえた南方の軍隊が、1913年5月から9月にかけておこした。

## 2

魯迅のあたらしい創作時期がはじまったのは、毛沢東のことばによると《世界革命、ロシア革命のよびかけ、レーニンのよびかけにこたえておきた》<sup>(1)</sup> 1919年の《5・4運動》の時代である。マルクス主義インテリの代表が主導的役割をはたした《5・4運動》の基本的スローガンは、徹底した妥協の余地のない反封建・反帝国主義斗争であった。《5・4運動》は反封建・反帝国主義の性質をおびた中国のあたらしい文化、文化革命のたたかいの力づよいたかまりをしめした。

毛沢東は1940年《新民主主義論》にかいている。《5・4運動》の文化革命は封建文化にたいする非妥協のたたかいであった。中国歴史にこれほど偉大で非妥協的な文化革命はかつてなかった。文化革命の旗じるしのもとに、ふるい道德にたいしてあたらしい道德を、ふるい文学にたいしてあたらしい文学をかかげたたたかいは、偉大な成果をおさめた。<sup>(2)</sup>》

魯迅はその運動でかがやかしい功績をあげたひとりである。文化革命の前期に、魯迅はあたらしい中国文学とあたらしい文学言語運動の先頭にたち、封建文化の陣地を勇敢に襲撃した。かれは中国最初のマルクス主義者で、また中国共産党創立者のひとり李大釗教授が参加した編集もしていた雑誌《新青年》に積極的に協力した。この前期の魯迅評論の特徴は、まず第一に、戦斗的、攻撃的精神にある。魯迅は中国人民のおもな敵封建的・帝国主義的勢力の暗黒支配とたたかう演壇として、雑誌を利用した。かれは子供に盲目的服従をおしえる儒教道德の偽善と姑息を非難し、男女の不平等に反対してたちあらわれた。魯迅はニセの愛国者が、ふるいものをしっかりとにぎりしめ、排外的な愛国思想を宣伝しているのをあざ笑った。かれはこういう、あたらしいものの敵を、無慈悲にばくろし、かれらをば《現在の屠殺者》とよんだ。革命的空気をつよいた

(1) 毛沢東選集、第3巻、モスクワ、1953年、258頁。

(2) 同上、259頁。

かまりにはげまされた魯迅は、将来はかならず現在にまさると信じ、この将来のため、中国の青年がたたかうようにうったえている。

《生命は死をおそれない——と魯迅はかいている——生命は前進する…そしてなにものにも、それをおしとどめる力はない。》

魯迅は《くさりきった教えや死んだ言葉をおしつけ、現在をはずかしめようとして》封建的なふるいものをまもりぬこうとする人びとの、中国の民族文化の歪曲化に反対し、民族文化をまもった。

《5・4運動》にこたえて、魯迅は中国文学に反封建・反帝国主義の旗をかかげ、評論ばかりでなく、小説でもこのたたかいに参加した。

魯迅のはじめてのリアリスチックな小説が《新青年》にあらわれた。1918年4月に《狂人日記》、それにつづいて《孔乙己》(1919年3月)、《薬》(1919年4月)、この三篇は現代中国文学史にあたらしい頁をひらいた。かれはそれ以来ふるい中国の暗黒勢力に、断乎とした不屈不撓のたたかいをはじめた。人民への愛情、祖国への愛情にはげまされた魯迅は、その解放のために言葉の武器でたたかった。魯迅はその作品をふるい社会の改革、人民の思想教育、個性の解放、《民族性の改造》の武器とみなしたのである。

《わたくしは病的社会のふしあわせな人びとのなかから、おおくの材料をとった、というのは、その病いを人にしめし、注意をうながし、病いをいやそうとしたからである。》

《狂人日記》で、魯迅は主人公の口をかりて、偽善的な仁義のことばで人をくう本質をごまかしている封建道徳に決定的な審判をくだした。かれは人をくう道徳とこの道徳にまもられている封建社会が、どれほど人の精神を圧迫したか、人間のさだめたおきてや権力がどれほどひろく、ふるい中国の家庭を支配しているかをしめした。魯迅はこの道徳をまもっている人々が残酷で、卑怯で、ずるく、恥ずべきだとはげしく非難した。封建的な中国の暗い現実を再現し、その害毒をあらわにしめした魯迅は、最もとうとくて神聖なるべき人間の生活がふみにじられてる社会が、一刻も早く滅びさることをねがい、その滅亡になんの憐みも感じなかった。偉大な作家・ヒューマニストはその時代の人び

とによびかけた，《子供をすくえ！》

《狂人日記》は魯迅がみずから認めているように、ゴーゴリの《狂人日記》の影響をうけている。それは人をにくしむふるい中国社会にたいする憤りの抗議であった。

もうひとつの短篇の主人公孔乙己の運命はかなしい。これはふるい型の墮落したインテリで、人生のめあてをなくした気のよわい敗惨者である。孔乙己は善良で同情ぶかい、だが、かれのまわりの人びとにとっては何のかかわりもないことだった。いたましい生活がかれの心をつめたくした。人びとの目には、かれがただの変りもので、素寒貧の宿なしにしかみえない。孔乙己は生きてゆけない、その生活はなかば餓えにせまられた悲惨なものである。かれの《学問》はだれにもいらぬのだ。かれはじぶんでも人間のクズだとはおもうが、おちこんだ怖ろしい迷路からぬけだすためになにかしようもしない。道徳的にゆがんでしまい、抗議の心や人間の尊さはおしつぶされている。餓えにせまられたかれは盗みをはたらく。孔乙己はかたわものとなり、ただひとり死んでゆく。

丁挙人にはほかの道があって、富と名誉によじのぼってゆく、魯迅はこの小説のなかでちよっとしかふれていないが、ふるい中国では丁挙人みたいにつめたく残酷な人が、人をくう世界に反抗する力のない人びとをことごとくギセイにしているということが読むものにはあきらかになる。

魯迅は支配階級が政治的・経済的圧迫のためばかりでなく、人民を精神的に奴れいとするために権力をふるっていることをばくろしている。封建思想は奴れいの心をたたきこみ、あたらしいもの、光りあるものをおしつぶした。《薬》の主人公茶店のあるじ華老栓とその女房は、教養はなしうちひしがれている。かれらの生活は偏見と迷信にとらわれていて、康大叔のような残忍な首切り役人をおそれている。ふたりは息子に、処刑者の生血にひたした饅頭をたべさせれば、胸の病いはなおるものと、わけもわからずに信じている。

しかし《薬》では、そのころ早くも人間の権利と人民の解放のためたちあ



がった、勇敢な人びとに注意をむけている。その道に達する第一歩は、圧迫者の揺ぎない支柱となっていた、清朝をたおすことであった。死にのぞみながら、牢の番人にいった若者の有名なことばは、《大清帝国の国土はわれわれのもの、人民のものであって、清朝のではない》であった。若者は死んだが、その抗議は孤立していないことがわかる。死んだ革命家の墓前に友のささげた花束は、かれの事業をうけつぐ人民のめざめを象徴している。

最初のリアリスチックな作品がでるとほとんど同時に、魯迅は詩の方面でも活躍した、1918年の《新青年》には《自話》詩がのった。それは唐俟というペンネームで、《夢》、《愛の神》、《桃の花》、《人の時》、《かれらの庭》などがあった。魯迅はこれまでの詩の伝統的なきまりをこえたあたらしい主義を提唱した。《輝やかしき未来はわれのりこえて進め》魯迅はこうかいた。あたらしい形式の中国の《自由詩》をつくったひとり魯迅が考えていたのは作品の改革であり、また古典詩のすぐれた遺産にたいし虚無的態度をとることにも縁がなかった。したがって、かれはふるい形式の詩もかいたが、このことは、当時の社会をゆるがしていた政治事件にこたえるさまたげにはならなかった。（《1月28日の戦争ののち》、《南京の歌謡》）。

1923年、短篇小説集《呐喊》がはじめて出版された、これには1918年から1922年までの間の14篇がおさめられている。中国の批評家によると、これは《5・4運動》後の中国文学におけるめざましいできごとであり、文化革命のはじめての勝利が現実にもみえむすんだ、とされている。魯迅は《呐喊》で、封建的・帝国主義的圧迫のいちばんひどい農民階級を主として主人公にえらんでいる。有名な魯迅の伝記作者王士菁は、中国の作家やおなじ時代のだれよりも魯迅が中国の農村をよくしっており、そして理解していた、といている。農民のいたましい生活、その無権利、貧困と盲目的信仰が、さけられない運命として《風波》、《明日》、《故郷》にしめされている。読者の眼のまえをよぎりさるものは、魯迅がかぎりない同情をいだいてかいた農民の形象、つまりただひとりの息子を死なしたやもめの単四、船頭の七斤、百姓の閩土である。閩土の運命はふるい中国の農民の典型そのもので、《子だくさん、餓え、重税、

兵隊，匪賊，役人，こうしたものに酷い目にあわされて，木偶みたいになった。》魯迅ははたらく農民の苦しい運命に同情し，農民からしぼりとり，そして圧迫している力をにくしみ，偏見の綱でがんじがらめにされた，ふるい農村の風習，封建社会の暗い政治をはっきりとしめしている。

《呐喊》ばかりでなく，魯迅の全作品のうちで，もっとも光りあり有名なのは《阿Q正伝》である。この小説は1921年北京の新聞《晨报》の文芸副刊に，1章ずつのった。これは人民性と愛国思想のあふれた魯迅の批判的リアリズムの傑作である。

はじめ，この小説はユーモアのある《きさくな話》にするはずであった，そこで作者は第1章で喜劇的要素を多分にとりいれた，しかし，かきすすむにつれて深刻になってゆき，その結果ひじょうにばくろの力のつよい，風刺作品となったのである。

この小説には日雇農民がいる。この男には土地も，女房子供も，家もなければ，名まえさえない。阿Qの形象には，ひどく落ちぶれて貧しい中国農村とまたそれを特徴づけている無知，抑圧，奴れい根性，無権利が反映されている。阿Qの人生はいたましい。かれは《よくはたらく男》で，仕事はできるのに，喰うや喰わずでいなければならない。女中の呉媽に惚れこんでもうまくはゆかぬ。生れてこのかた筆をとったこともないかれには，円をえがくことさえ満足にできない。かれとしては恥かしいのだが，まん円に円をかけるのは低能だけだとおもって自らなぐさめる。まわりのもの，とりわけ《趙大人》は阿Qにであいさえすれば，あなどりはずかしめ，口ぎたなくののしり，うちすえる。

しかし阿Qはほかの連中よりじぶんのほうが上等と心得ているから，《精神の勝利》の哲学をつかって，じぶんの敗北はなんでも弁護したがる。敵よりすぐれていることを証明するために，かれはじぶんの顔をなぐり，それで体面をつくろいさえする。阿Qの形象に具現されている特徴は農民だけにあるのではない。《阿Q主義》とは《精神の勝利》と自己偽善の敗北主義哲学であり，従順な奴れいのれい属を教えるものである。

阿Q主義の根源は半封建・半植地的中国社会の特質のうちにみいださね

ばならない。中国の封建的上層貴族は帝国主義者たちのあわれむべき敗北者となり、そしてまた、清朝が内部から腐敗し、危機がふかまりすすむといった条件のもとで、現実をはなれた道徳的優越性をおもい、みずから慰めたわけである。ブルジョア自由主義インテリゲンチヤはその投降主義との断乎としたたかいにたちあがれなかったが、そのいいわけとして、精神勝利の方法にはしりよった。だが、もし、阿Q主義の敗北思想が、支配階級とその召使いどもにとって、かれらの社会制度が歴史的にはほろびる運命にあることを、気分のうえで弁護するものとすれば、この思想で毒された被圧迫者は、たとえ一時的にはせよそのなかに慰めをみつけようとした。権力をにぎっている階級が、けんめいにふきこんだ阿Q主義は、農民の解放運動にたいへん損害をあたえ、かれらの抵抗心や革命性をおさえつけた。盲目的な憐れみにかられず、中国農民の精神をうまく解放しようところぞした魯迅が、阿Q主義をコッピドク批判する具体的対象として、農村の作男をえらび、ほかの階級のものにしなかった理由は、ここにある。

中国の有名な文芸学者周揚のことばによると、魯迅は農村を題材にした小説、とくに《阿Q正伝》で、《進んでもものごとをしない、おくれた無自覚な農民の精神面を、深刻に集中的に批判した…魯迅は中国人の圧倒的多数をしめている農民の精神的欠陥を批判し、それを民族性のよわみとかんがえた。かれは民族性の改造をうったえたのである。》<sup>(1)</sup> 社会の病根を根治しようとした、このような批判は、魯迅のリアリズムのもっとも力づよい特徴のひとつである。りっぱな魯迅研究者であるとともに、左翼作家連盟で活躍した馮雪峯は《阿Q正伝》を専門に論じたもので、とくにつぎの点を取りあげている、《魯迅のルンペンの作男としての阿Qと阿Q主義のご本尊としての阿Qにたいする態度はちがう》<sup>(2)</sup> 魯迅はするどい風刺のほこさきを、阿Q主義のご本尊としての阿Qにむけたのであって、作男の阿Qにむけたのではない。

魯迅は、この主人公の欠陥をあざわらつてはいるが、それとともに、同情

(1) 周揚、《5・4》文学革命の戦斗的伝統《人民文学》1954年5月、第5号、3頁

(2) 馮雪峯《阿Q正伝》を論ず、《人民文学》、1951年10月、第24号、54頁。

もしている、それは、悪の根源が社会のしくみそのものにあることをみているからで、この社会のしくみによって、支配階級は偽善的な道德をかりて阿Qなみの貧農の心を奴れい根性におさえつけておく。この小説は、阿Qや阿Qに似ている、しいたげられ無知な人びとを生みだす、未荘文化にたいする憎しみをおこさせる。

阿Qの形象はひろく一般化されており、そのうえ、阿Q主義の特徴ははっきりとでていて、これは、封建中国とふるい中国社会のすべての階級の典型的現象であるが、魯迅はそれをグロテスクの手法にまでした。しかし魯迅は憶測した図式のなかに、典型的なものをえらびだしたのではなく、生きとした、具体的で、しかも真実性の深刻な形象のうちにえらびだしたのである。ここに生活の真実から一步もしりぞかない芸術家魯迅の偉大な巧みさがあらわれた。

《阿Q正伝》で、魯迅は《趙旦那や銭旦那》の利益となり、人民大衆にはなんのたしにもならなかった、辛亥革命の本質をばくろした。革命のためには、弁髪を頭のうえにグルグルまきにしたり、革命党のき章をかったり、静修庵で《皇帝万才万万才》とかいてある龍牌をこわしたりする、《革命的》行動でやるエセ革命家を、かれはあざわらった。ここで魯迅は、それらの偽善者たちが、革命家をよそおうとしていることをかたっているが、かれの特徴としてアイロニーがはげしい風刺になっている。

阿Qのばあい、革命のしらせで、これとはちがった態度をとる。かれは圧迫している連中にしかえしをするために、革命家たちのなかまにはいることに反対はしない。阿Qは《にくたらしい奴らをぜんぶやっつけてやれたら》と夢みた。しかしかれは《旦那たち》が、革命党にいれてくれるかどうか、と心配になる。自然発生的な抗議は、有産者の権力のまえでは奴れいの恐怖心があるため、あやふやとなる。阿Qはじぶんの阿Q主義と奴れい根性にうちかって、革命党のなかまにいれてもらいに、ニセ毛唐のところへたのみこむ。魯迅は農民が客観的には革命をおこさないわけにはいかない、とみてとった、それというのは、革命によって搾取者の圧迫から解放されることを期待していたからだ。このばあい、魯迅がかんがえているのは、阿Q主義と何世紀にもわたる圧迫が、

農民の革命精神をおさえつけたこと、農民にあらわれている阿Q主義の批判には非妥協的でなければならないということである。この小説をよんだひとは、《趙且那や錢且那》の権力をほろぼさないかぎり、圧迫されている農民はほんとうに自由にはなれないと感ずるにちがいない。

《阿Q正伝》はふるい中国の農村生活にかんする輝かしい作品であるが、これには、魯迅の作家としての才能が、おどろくほどはっきりあらわれている。馮雪邇が《世界のリアリズム文学の最高峰のひとつ》といったことに、同調しないわけにはゆかない。

《呐喊》の第二のテーマは、インテリゲンチヤで、これは魯迅の作品のうち農民のテーマのように、たいせつな地位をしめている。

《白光》では、主人公として、田舎教師の陳士成がでてくる。かれはいやになるほど失敗しつづける、かれは16回試験をうけたが、16回とも落第した、それというのも、貧乏で試験官にいろいろもつかえなかったからである。金がほしさに、かれは地下にうめられている宝をさがすようになる、しかし、金のかわりにみつけたものは、ところどころ欠けた人間の下あご骨である。絶望し、気狂いじみて死ぬのが、陳士成の悲劇的結末である。この小説には、ふるい中国ではどんなに出世しようとして《小人物》があがいてみても、ほろびねばならない運命は、さげがたい、ということがしめされている。

あたらしいインテリの代表といわれる《端午節》の主八公范玄綽を、魯迅はまるでべつにえがいている。魯迅はこの形象をかりて、ことばのうえだけで、あたらしいことどもを歓迎したにすぎない、その当時の中国インテリの精神のむなしさと偽善をばくろした。《たいしたちがいはない》ということばをかんがえだした范玄綽は、このことばで、エゴイズムと高慢ちきさのだきあわさった無意志と聖人ぶった偽善を正当化している。

魯迅はその小説で、個人と社会のかつとうばかりでなく、インテリゲンチヤの革命的事件にたいする態度もあらわそうとした。このテーマのものは、《頭髪の話》であるが、これは建国記念日にだけ国の運命をおもいだすような、

自由主義インテリの空虚なオジャベリをやっつけている。この小説の主人公はヨーロッパ化した中国人で、じぶんでも教養あり、公正で、原則をもっている人間だと心えている。ヨーロッパで、かれは、中国人を相手にするのにいちばん効能があるのは、ステッキのことばだ、といきる民族主義に憤慨したものだ。しかし、中国にかえると、かれじしんが自国のひとつつきあうただひとつの方法として、ステッキをふりあげるようになる。《頭髪の話》には、革命にたいするブルジョアインテリの悲観的態度、かれらの人民の力と将来にたいする不信が反映されている。魯迅はこの小説で、空オジャベリのインテリや変節者には中国をすくうことができないということを、政論的傾向性をもって、はっきりとすどくしめしている。

魯迅がこうしたインテリのエゴイズムと薄情さに反対し、《ちいさいできごと》の主人公の車ひきにある、働らく人びとのほんとうに人間らしい心を、かれらの上においていることは注意に値いする。魯迅はこの小説で、人民にたいするじぶんの態度を、かんがえなおしている。はたらく人、車ひきの気だかい行いは、かれをはげました。

《この数年来の役人の才智も武人の勇気も、子供のころ読んだ《子曰く、詩に云う》とおなじく、ひとこともおぼえていない。ただこのちいさいできごとだけが、わたくしの眼のまえにたち、わたくしを恥じいらせ、わたくしをふるいたたせる。それは、わたくしに勇気をわかせる、希望をつよめてくれる。》

この小説のエピソードは、ちよっとみるとあまりにも日常平凡なことであり、とりたてることもなさそうである、しかし魯迅にとっては深刻な意味があった。まぎれもないヒューマニストとして魯迅は、ちいさな、めだたないことにさえ、人民の気だかいたましいのあらわれをみることができ、読むものにかれらへの愛情と尊敬をおこさせる。しかもかれはそれを声だかに議論したのではなく、作品の芸術的真實性によってなしとげている。ヒューマニズムは、かれの作品でいちばん重要な特徴のひとつである。

魯迅の作家としての方法は、憶測してつくりだした形象や境遇とはべつなものである。かれは同じ時代の人びとがしたように、きわだったものをさがし

だして、生活を誇張したのではない。魯迅は平民の《小人物》を、ありふれた環境のなかでえがいた。車ひき、田舎教師、宿なしの雇農、農村の女、とるにたらないような小さい店のあるじ、これらに魯迅の注意があつまっている。かれの作品中の主人公たちは、その生きとした人間のすがたをもって、直接に生活のなかからあゆみだしているが、魯迅はそれをつたえることができた。魯迅はチェホフとおなじように《生活の悲劇性》をしめし当時の中国文学につよくあらわれていた自然主義の影響におちいるようなことはせず、人民のなかにあるすぐれた品質をめざめさせようとした。主人公に独特な個人的風格をもたせた魯迅は、ある社会階層の典型的特徴をそのなかに集中させている。

封建制度のぼくろは、中国ではあたらしいものではなく、18世紀には有名な呉敬梓の《儒林外史》がある。19世紀と20世紀のさかいに、風刺小説のチャンネルで、呉沃堯、李宝嘉、曾樸があらわれて成功をおさめている。かれらの作品は、官僚の収賄、腐敗、地方裁判所の横暴、ふるい教育制度、迷信、売淫そのほかの社会悪をぼくろして、封建制度がおとろえてゆき、どうしてもほろびることをしめた。しかし暴露小説の代表者たちの批判的リアリズムは、ふるい中国社会にあるおおくの基本的矛盾にふれないのがつねで、農民はふつうこれらの作家の視野のそとにあり、かれらの批判は徹底した性質をもっているとはかぎらなかつた。

魯迅のリアリズムの、あたらしい革命的・民主的性質は、第一に、社会にたいする偉大な作家の態度、人民の民族的自覚をよびさまし、悪を根絶し、人間を解放することで、ふるい社会を改造しようとしていることに、封建主義の反動勢力とそれが生みだしたイデオロギイにたいし、徹底した容赦のないたたかいをしたことであらわれている。魯迅のリアリズムのぼくろの力がいちばん高度に達成されているのは、ふるい中国農村に題材をとった作品、とくに《阿Q正伝》である。

《……魯迅は崩潰過程のうちに、封建社会をえがいた——と毛沢東同志はかいている——かれは、帝国主義勢力が人民を圧迫している社会制度の害毒に

ムチをくわえた。かれは怒りのこもった風刺の筆で、これらの暗黒勢力をえがいた……<sup>(1)</sup>》

魯迅作品の特徴は愛国主義の精神である。封建的圧迫のカセのなかでたたく祖国と人民への愛は、魯迅を中国解放のたたかいにふるいたたせた。圧迫されている農民にたいするかれの同情にはペシミズムがない。中国をおくらせている畸形的なものにたいし、かれの批判は情けようしやない。べつな人間関係をもつ将来が必ずやってくることを魯迅は信じてうたがわなかった。この希望は《故郷》にあらわされているが、その表現はすばらしい。

《たかい壁がかれらをへだてることなく、わたくしのようにさみしい放浪の生活をせず、また閩土のように愚鈍にもならないようにとおもう……かれらは、われわれの知らないあたらしい生活をしなければならぬ……

希望とは、あるともいえるし、ないともいえるであろう。それは道のようなもので、人びとがふみしめて道となるのだ。》

1926年に、魯迅の二番目の小説集《彷徨》ができた、これは1924年から1925年のあいだにかかれた11篇の短篇をあつめたものである。魯迅はここでも、中国の現実をリアリスチックにしめし、ふるい半封建的・半植民地的中国のやまいを、あいかわず断乎としてばくろした。

この小説集のはじめにあるのは《祝福》である。主人公祥林嫂の運命は、人が人をにくみ偏見が支配的となっていた、ふるい中国農村の何百万という女の運命でもあった。祥林嫂は実直、真面目、情けぶかく、はたらき好きであったが、みじめで残酷なまわりの条件のため、いやしい奴隷のような婢になっている。いたましく、よろこびのない生活が、祥林嫂の性質をわるくしてしまいかの女は自信がなくなり、頭のはたらきはにぶくなる。かの女が心をうごかすのは、ただ来世というものがあるかどうかだけである。祥林嫂は、かの女をあくまでこきつかいながら、のちに年をとり役にたたなくなると追いだして乞食にし、餓え死にさせた、家の人びと対置されて、その形象がつよめられている。

(1) 毛沢東、延安での魯迅記念演説、雑誌《7月》、1939年、第10号。



《離婚》にはほかの典型の中国の女がいる。愛姑は祥林嫂のように人間としての女の権利をみとめない封建的な家庭のしきたりのギセイとなっている。しかし愛姑は、祥林嫂とはちがい、あざけられるのにたえしのんで、だまっていようとはしない。忍従とすくいのない宿命にとってかわり、じぶんの権利をまもろうとして抵抗がはじまる。この抵抗にはまだ限界がある。愛姑はじぶんのために、ひとりで、たたかったのであるから、失敗したのも不思議ではない、封建的秩序をまもっているものが勝利をおさめる。しかし、愛姑のような何百万という中国の女が、めざめて、じぶんたちの権利をまもるために、たちあがるのが、読み手にはあきらかになる。

封建的伝統への抵抗をえがきながら、魯迅は早期の作品において、幾世紀もの暗黒支配に反抗してたちあがった孤独の主人公を大衆のなかにみつけた。この面で特徴があるのは《常夜灯》である。吉光屯の常夜灯は村の年よりがいうように梁の武帝のときに火がともされたものといいつたえられ、中国の封建社会がみじめなのままでかわらないでいることを象徴している。わかいものでさえ、その火をけせば《世のなかがおしまいになる》と、かたく信じている。この常夜灯をけし、そうした迷信をうちやぶろうとしたわかものを、村の人びとは、ちょうど《狂人日記》の主人公のように、気ちがいあつかいをする。《火をけせば、いなごも畑をあらさないし、わるい病気もなくなる》と、わかものはいう。脅してもすかしても、かれの意志をうごかすことはできない。かれの悲劇は、ただひとりで抵抗しなければならぬことである。村の衆はかれを理解し、たすけるどころか、反対に、制裁をくわえようとする。

魯迅は早期の作品では、ふるい中国農村の無智、無関心と虐げられている人びとのうしろに、まだ農民大衆の革命的力をみなかった。このことは《呐喊》と《彷徨》の作品からみていえる。かれは農民の解放を熱烈にもとめたが、その解放も外からくるのをあてにしていた。まだマルクス主義者でなかった魯迅は、ふるい《病的》社会をくつがえし、社会の進歩をうながすことのできる力を、かれがほとんどしらなかった頭をもたげはじめたプロレタリアートにでなく、その運命に関心をそそいでいたインテリゲンチヤにもとめようとした。

これはとくに《彷徨》でいちじるしい。

魯迅の小説中の性格と立場は、辛亥革命後と、過去の重荷から解放され、自由、平等と進歩の思想をまもることが目前のしごととなっていた転換時代における、中国の農村と都市のインテリの生活を、完全に鮮明に反映している。インテリゲンチヤが人民を精神的にめざめさせることができるためには、それが堅強で思想的原則性を持ち自由意志がなければならない。まさにそのため、魯迅はインテリゲンチヤを理想化せず、反対にその否定的な特徴の批判に注意を集中し、社会や人民のため何にもならず、灰色の空虚な生活をしているインテリゲンチヤの典型をしめしたのである。魯迅は、困難のまえに降伏して倦怠にふけているものを非難し、二重の道德をもった順応者や保守主義者をきびしくばくろした。それやこれを、かれは半封建・半植民地的中国社会のいけにえとかんがえたのである。

魯迅は《彷徨》のなかに、インテリゲンチヤの画廊をひきだしている。幻滅と生活への無関心、これが自信をうしない貧困におちこんだ《居酒屋にて》の呂緯甫の運命である。呂緯甫は友と《中国の将来の運命を終日論じあった》ことを、かなしくおもいうかべる。しかし、人生の悲運にうちくだかれた10年のあいだに、あたらしい思想はわすれてしまい、あいかかわらず儒教をおしえている。呂緯甫は《どうにかお茶をにごして》という、かれのことばどおりの生活をするようになった。

美しいけれども幻想的な夢と平凡な生活とのかっとうをあらわしているのが、《幸福な家庭》である。やすらかで平和な家庭をかこうとしたものでないこの作家、その作品の主人公の幻想は、プチブルヂョアの幸福のわくをでていない。

魯迅はおなじ名前の小説から、尊敬すべき(?) 哲学者高の悪徳、無智、あつかましさを、あざわらっている。高先生にあるのは学問ではなく、自己宣伝と恥ずべき行いで、まじめな仕事よりは賭博で手軽にもうけようというのである。高は進歩的とみられるのがいやではなく、新聞には、勿体ぶった題で《祖国の歴史の修正——中国市民の任務》といった小論ものせたりする。しか

し、女子中学校ではじめての授業で失敗してからは、あっさりとしぶんの信念はすててしまい、学校とくに女子の学校は、風俗をそこなうという考えをもつようになる。

《石鱗》の主人公四銘は頭のにぶい保守的な男で、偽善者である。時代思潮にしたがい、かれは息子に英語をおしえこむ、しかししぶんは懶惰な友だちのなかまにはいって《全国民が貴大統領に請願して、聖經を重んじ、孟母を崇拜することにより、風俗のすたれれをとりもどし、国粹の失われぬよう、とくに明令をだされることを議する文》をどう書くべきかと心をくだしている。この種の宣伝によって、魯迅は四銘とその仲間の、頭はにぶく自己満足しながら、封建的な古いものをまもろうとしている連中を、すばらしい手ぎわでばくろしている。

《兄弟》の張沛君は四銘とおなじく偽善者である。みかけは立派だが、かれはしぶんの生活のために、動物的な恐怖にとらわれているから、いつなんどき罪をおかし、肉身の弟をなきものにするかわからない。

むろん、こうした主人公と、これらの代表するブルジョア・インテリゲンチヤに、魯迅は同情をよせてはいない、もっとも、かれらのなかには呂緯甫のように、魯迅が愛惜した人物もないことはないが。

魯迅はその創作方法に反して、とくに《孤独な男》と《傷逝》では、誇大なことばで表現している。しかし、ここで、かれは理想的なインテリゲンチヤの型をつくるために、生活の真実とはちがわせているようにおもわれる。つよく自信にみちた人がらの教師魏連受は、ふるい社会をにくんでいる。かれがよるこべるのは、中国の希望とその将来がある子供たちだけである。しかし、その魏連受さえ、おしまいには、うちまかされてその独立不きの精神をうしなってしまう。餓えと生活の必要により、かれはむかしの信念をかえ、かつては、にくしみそのためにたたかいもしたものを、あがめなければならなくなる。かれの不幸と孤独は深刻である。

《傷逝》では、むごい世間からのがれた若ものの幻想的なころみと幸福な家庭の夢を、人生がどんなにうちくだしているかをしめしている。魯迅は

盲目的な愛情のために人生からはなれたことを非難しているが、小説の主人公涓生の心をひきつけたあたらしい道は、やはりぼんやととして曖昧なものにおもわれる。人民大衆と革命斗争からひきはなされた、中国のあたらしいインテリゲンチヤの運命の悲劇を、魯迅はひじように力づよい芸術性と説得性でえがいた。それゆえ、魯迅の伝記をかいた王士菁が、インテリ階層に積極的主人公をみつけられなかった魯迅が、ふたたび農村にもどり《彷徨》の《離婚》をかいた理由はそこにあることを指摘している。

そのころの魯迅は、一時的に幻滅を感じ、期待はずれの、じぶんの階級の代表者たちに支えとなるものを見つけれないで、孤独感におちいつていた。魯迅の詩《彷徨に題す》にはその理由がのべてある。

あたらしき文学の国はさみしく  
 いにし戦さのにわはしずか  
 天地あめつちにのこる戦士はひとり  
 戦はこをにないていたずらにさまよう

しかし、この一時的な幻滅も《病い》をもっているふるい社会が必然的に崩れさり、あたらしい社会勢力が勝利をおさめるという、魯迅の確信をゆさぶることはできなかつた。そのために、かれは作品をかいている。魯迅は寸時もたたかいをやめたことはなかつた。インテリゲンチヤの彷徨、社会生活におけるかれらの消極性と弱さをしめして、魯迅はあいかわらず、周囲の中国の現実のおくれて保守的なもの、みにくくていやしいものに、風刺の劔で打撃をあたえた。

その精神からいって《彷徨》にちかいは散文詩の《野草》(1927年)である。これは短かい24篇からなり、内容は多様であるが、あらわされている気分と芸術的特異性にはふさわしい。さいしよ、この散文詩は1924年から1926年にかけて雑誌《語絲》にのつた。

《野草》には、魯迅の探索と沈思の世界、かれがたたえた、人間のたましいの気だかい理想の世界がひらかれており、悪と残酷にたいする辱しめがあ

る。《野草》によってわかることは、魯迅がどれほど深刻に、人びとと社会現象を批判しており、それに、どれだけ正しくまた表現力にとんで、人間の感情や気分のあらゆる矛盾や移り易さをことばにつたえているかである。《野草》の文体の特異性は、そのジャンルが変わっているというだけでなく、時代の条件によっても説明できる。魯迅はみづから《野草》英訳本の序でその特徴をのべている。

《おおくは、折にふれての感想である。当時ははっきりと物をいうことがむずかしかったので、だいぶすなおでない言葉づかいがある。》

魯迅はよく、夢の形式をかりており、幻想的要素をひろくとりいれ、比喩にたよっている。魯迅は好んで中国の風景をえがいている、がその観察はするどい。その風景描写——《雪》、《秋の夜》——にはリリズムときびしいほどの簡潔さがある。

《野草》の内容には、社会の流れがはっきりと感じられる。魯迅はいろいろな社会のできごとや現象にたいするじぶんの態度をあきらかにしている。街頭のやじ馬どもをにくんだ魯迅は、《復讐》でかれらの悪をあざわらっている。《このような戦士》には、軍閥につかえている、偽善的で狡猾な学者や文学者とたたかう、不屈の決意があらわされている。《智者と賢人と奴れい》は、抗議できない奴れいに適確な性格をあたえている。《立論》で、魯迅は正直な人間としてとおり敵をつくらぬよう、じぶんの考えを發表しないのを分別と心得ている、インテリの無原則性をからかっている。《野草》の作品のいくつかは、中国社会生活のある具体的事件からでてくる。すなわち、段祺瑞政府が北京の学生デモ隊を射殺した事件ののち書かれたのが《色浅き血痕のなかに》である。

《野草》の題辭は、カモフラージュした形のうちに、反動権力の横暴があらわされており、革命斗争のたかまりがほのめかされている。《野草》の第4版がでた1928年には、わけがあつて、政府の検閲により序はけずられた。

しかし《野草》には、魯迅の内的矛盾と、それに打ち勝とうとするかれのたたかいも反映されている。病的に矛盾した気分をもたらすものは、《影の告

別》、《墓碑銘》、《死火》などである。魯迅はこれらに、じぶんの内的世界と体験を分析しようとした。後になって、かれはいつている。

《その後わたくしはもう、こういうものが書けなかった。時勢の移り変りをうけて日々によってゆく環境のもとで、おなじような印象があるにしても、こういう作品はもはや必要でない。つまりは、このほうがよいのかもしれない》

《野草》の意義は、その高い芸術的成功と明確な文体の独自性にだけかぎられない。特異な深みと思想の躍動性のある内容は、思想的に転機にあった時代の作者の精神を理解するたすけになる。

《野草》をかいた年に、魯迅は封建的・帝国主義的勢力と不屈のたたかひをしていた。これは《華蓋集》（1926年）《華蓋集続編》（1927年）におさめられている、かれの戦斗的・革命的政論をみればわかる。主として、この漫筆というか小評論とでもいうものは、その文体からいって、おおくは一般に散文詩である。しかし、そのテーマは尖鋭きわまりない。魯迅は反動的な章士釗の《現代評論》派の人びとに、くってかかっているし、北京女子師範大学の革命的傾向をもった学生を、おおくの文章のなかで支持し、警察の迫害をばくろしている。魯迅のこの政論集の内容を特徴づけて、有名な批評家で中国共産党の指導者のひとり瞿秋白はかいている。

《むろん、これは社会科学の論文ではなく、生活体験を直接とらえたものにすぎない。しかし、かれの神聖な憎しみと鋭い風刺は、軍閥、官僚とかれらの走狗たちに集中している。》

しかし、この年代の魯迅は、文学の戦線での革命斗争中のじぶんの地位がよくわからなかったし、《野草》ばかりでなく《彷徨》の内容にも反映されている内的矛盾に、最終的にうち勝っていなかった。

その後、革命運動が力づくよく高まったことと中国共産党の思想の影響をうけてから、魯迅ははじめて以前の観点をなげすめたのである。人間の人間による搾取が支配している古い社会制度をほろぼすためには、あくまでも大衆を醒めさせることだけでは不十分で、プロレタリアートの指導する革命だけが搾取階級をうちたおし、中国人民に解放をもたらすことがわかった。《二心集》の

序で魯迅はかいている。

《はじめは、よく知っているじぶんの階級をにくみ、それがほろびるのをくやみはしなかった。のちに、事実の教訓によって、頭をもたげてきたプロレタリアートだけに将来があることをした。》

このマルクス主義への転化を準備したものは、魯迅のそれまでの活動、かれの革命的・民主的思想の発展、農民の解放と個人の精神的解放のためたかかった、徹底した反封建・反帝国主義斗争である。

早期の魯迅のふるい社会にたいするたたかいは、小ブルジョアの革命性からでた、愛国者と人民をいとおしむものの戦いであって、プロレタリアートの階級的立場からでたものではなかった。あたらしい社会を夢みてはいたものの、作家には、それがどのようなものであり、どんな社会の力が中国をあたらしい社会にみちびいてゆくかを、はっきりと考えられなかった。魯迅は革命的民主主義者であった。かれは人民の利益をまもりはしたが、まだ革命的人民の仲間にははいっていなかった。

1919年の《5・4運動》は、偉大な10月社会主義革命の直接影響をうけておきたのであるが、これは魯迅の革命化に、ひじょうに大きい影響をあたえた。魯迅はロシア革命の勝利を歓迎した。しかしマルクス主義の真理がすぐにはわかったわけではなく、そのためには探索と内面的なたたかい、進化論からマルクス主義への思想の発展過程が必要であった。瞿秋白は魯迅の思想を特徴づけてのべている。

《魯迅は進化論から階級斗争の理論にうつった。紳士階級に叛旗をひるがえて、プロレタリアートの事業と働らく人民の、ほんとうの友だち戦士になった。4分の1世紀のたたかいの後に……かれは苦しい体験と深刻な観察をとおして、たぐいない革命の伝統をもつ、あたらしい陣営にやってきた。》

魯迅の思想と作品の発展は、中国人民の民族解放運動の先頭にたっていたプロレタリアートが、現実中国の舞台にたちあらわれた、《5・4》事件の後の、中国における社会の変動と階級斗争の性質を反映している。早期の作品でも、圧迫と不平等をうみだす正当ならぬ社会を説明している。芸術家のする

どい眼で、魯迅は貧富のあいだの、おどろくべき矛盾、つまり、働らく人びとの血であがなわれた幸福をたのしんでいるものと、主人の圧迫の重荷でつぶされたものとの矛盾をみている。この生活の深刻な意味が、かれのリアリズムの革命的・民主的内容をゆたかにしているのである。社会の否定的現象を容赦なく批判している魯迅のリアリズムは、何よりもまず、偉大な歴史的転換時代における中国の現実の要求からでたものであった。

それとともに、魯迅は羅貫中、施耐庵、曹雪芹、呉敬梓など、不滅の中国古典文学の伝統や、西洋、主としてロシアの批判的リアリズムの経験と立派な成果などをうけつぎ、創造的に発展させたのである。

進歩的で革命的・民主的思想とヒューマニズムの伝統をもった、ロシア古典文学は、魯迅の創作方法の確立によい影響をあたえた。かれはいつもロシア古典文学に《師と友》をみていたのである。魯迅がみずから認めるように、ロシア文学はかれの精神の糧であった。

《ロシア文学は——と魯迅は《中露の文学のむすびつきを祝す》でかいている——被圧迫者のすばらしい魂、その苦しみ、そのたたかいをしめしている……ロシアの皇帝が中国で侵略政策をとったことを、知らないものはいないであろう、だが、その文学から、われわれはいちばん大事なものを、世界にはふたつの階級、圧迫者と被圧迫者がいることをしったのである。

……これはその時としては偉大なことで、火の発見にもひとしく、原始人が喰べものを煮たきすることをおぼえ、あかあかとした火で、夜の暗闇を照らしたようなものであった。》

ロシアの作家が魯迅にあたえた影響についていえば、はげしい風刺家のゴーゴリをあげねばならないが、またチェホフも、社会悪と《小人物》の生活に生々しい関心をおこさせたことで、影響をあたえている。魯迅がチェホフにちかいは、郭沫若が《チェホフと東洋》で、たいへんよく語っている。

《魯迅の作品にたいするチェホフの影響は、テーマ、筋の構成、主人公の性格ばかりでなく、作品の思想的、精神的な親近性に、きびしく仮借なく偽善をばくろしていることに、まわりの現実のけがれを一掃しようとしていることに



みることができる。<sup>(1)</sup>》

ロシア古典文学の影響は、作家としての魯迅の手法の妨げにはならなかったし、民族的伝統をうしなうことにもならなかった。魯迅がしごく民族的であることに変りはなかったのである。かれは綿密に中国文学史を研究し、その結実として、たとえば、《中国小説史略》、《漢文学史綱要》の精細な著書があらわれた。魯迅は施耐庵の《水滸》、羅貫中の《三国志演義》、とくに呉敬梓の《儒林外史》を高くかい、過去の作家の経験からおおくのものを学びとった。民族的な物語風の伝統が魯迅の創作方法の形成のうえでは顕著である。かれは唐の古典小説の構成手法を熱心に利用した。かれの短篇の表現の簡潔さと連貫性も、古典小説の形態にちかづけている。人物の名まえでも（藍皮阿五、王鬚、紅眼阿義）《水滸》の影響が感じられる。《石鱗》の四銘には《儒林外史》の范進の形象が生きいきと連想される。しかし魯迅はじぶんの作品では、古典文学から形象や手法を、皮相にも機会的にうつすことには、がまんができなかった。古典の伝統との精彩あるむすびつきを失わないで、かれは多種多様な弾力性のある、あたらしい芸術形式を創造した。茅盾は魯迅の作品のこの特徴について、《呐喊》を読んで》でいっている。

《中国の新文学で、魯迅はいつもあたらしい形式をつくる先駆者であった。《呐喊》のなかの10数篇のほとんどどれもが、あたらしい形式をもっており、これらのあたらしい形式は、わかい作家たちに、つよい影響をあたえずにはおこななかった。》

魯迅は性格や環境をくわしくかくことはしない人で、描写は簡潔である。かれの非凡な小説には、気まぐれで作品の内容に編みこまれた、余計なものも美辞麗句もない。かれは、ことばの飾り、気どった形容や比喩を注意ぶかくさけている。魯迅が形象をつくるためには、ことばは少くとも、ひじょうに適切で表現力にとんだ特徴が、すこしあれば、充分だった。孔乙己の人物描写がそのいい例である。

《孔乙己は、立ち飲みの仲間では、たったひとり長衣をきていた。かれは

(1) 郭沫若選集、国立出版所、モスクワ、343頁。

背がたかく、顔は青白い、しわだらけの額には生傷のあとがたえず、ごま塩のあごひげは薄汚かった。長衣は長衣にちがいないが、よごれたボロで、10年も繕いもしなければ、洗いもしないといった代物だった。》

魯迅のばあい、細ごまとした生活の事柄を人物の習慣や心情をうったえることほど重くみていない。かれの小説には、ふんだんな自然の描写はないが、それをもちいているばあいには、やわらいだりリズムをかもしだし、光と音のニュアンスを巧みにつたえている《居酒屋にて》。

魯迅は長たらしくて、あきあきするような会話をさけている。たいていのばあい、かれには、主人公の対人関係をしめす、短かい言葉がちよっとあれば、ことたりたのである。たとえば、《阿Q正伝》の阿Qとニセ毛唐の対話がそれで、

《西洋先生の言葉が一区切りつくと、阿Qは勇気をだして、口をきった、《ええと……その…》——だが、こんどばかりは、どうしてか、《西洋先生》とよびかけられなかった。話をきいていた四人がびっくりして、振りかえった、それで《西洋先生》もやっと阿Qに気がついた。

《何だおまえは？》

《わっしは……》

《出てゆけ！》

《わっしも仲間にとおもいやして……》

《消えてうせろ！》——《西洋先生》は葬い棒を振りあげた。

この短かい対話には、《西洋先生》の乱暴な冷たさと悪意、阿Qのぐずぐずとした躡らいと奴れい根性があらわれている。

人間の精神世界の反映を基本任務とした魯迅は、1人かまたは2,3人の登場人物のまわりに、事件を集中している。かれの小説には発展した面白い筋はない。主要人物（《頭髪の話》）の行いや考えから、読者の注意をそらさないようにしながら、かれはよく小説の外面的な主題をぎりぎりまでちぢめている。殆んどどの作品でも、構成には特異性がある。魯迅は評論的な本題をはなれた話をもちいている。《阿Q正伝》のまえがきなどは、打撃性をおびた評論

としてかがやかしい。

魯迅は同情し共感をおぼえているもの（《故郷》の閩土）を、ひじょうな暖かみと和やかなユーモアでかいている。だが、《趙且那》や偽善的で冷たいインテリ四銘や范玄緯にたいする辛らつな描写には仮惜ないものがある。魯迅が得意とする手法はアイロニーである。

魯迅は小説と評論で、現代中国の文学言語の創造上、おおいに貢献している。1916年の《5・4》の後、《文学革命》運動をしたおおくの人たちは、人民の生き生きした話言葉をもとにした、あたらしい文学言語の存在権利を形のうえだけで訴えたにすぎなかった。魯迅は小説と評論によって、ことばだけでなく事実においても、あたらしい文学言語の勝利を不動のものとした最初のひとである。死んだ文語《文言》をいつまでも文学用語にしたがっている人びと、文学を物知りのせまい範囲のもちものにし、人民大衆から遠ざけようとして、清新さをうしなった古臭いおきまりにしがみついている人びと、こうした連中を相手にかれば勇敢にねばりつよいたたかいをした。

《文学を物好きの慰みものにしてはいけない——と魯迅はかいた——すなおで、わかりやすい、現代の文学言語が必要である》。

しかし、魯迅は生きいきとした話言葉をめざしてはいたが、他方では人民性と人民の智慧をあらわしている古典文学のいい点も利用することをわすれなかった。こうして、作者の言葉の表現性はつよまっている。魯迅は作品の言葉にはしごく綿密で、祖国の言葉の純潔をまもり、またこれを文学青年にたたきこんでいる。

芸術の技巧にたいする魯迅の伝統は、今日では中国作家の立派な手本になっており、かれらは、ゆたかな思想性ある内容と芸術的にまとまった形式の有機的結合を魯迅に学んでいる。

### 3

1925年8月、教員騒動に加わったこと、それに北京の学生の革命的要求を支持したかどで、魯迅は、反動大臣章士釗の命令により、教育部僉事の職をと

かれた。魯迅にたいする攻撃ははじまった。1926年8月、魯迅は北京から廈門にゆき、廈門大学文科国学系の教授になったが、1927年1月には革命的な広東へ移って、中山大学文学系の主任になった。蔣介石が反革命の裏切りをしてから、広東では大がかりにコミュニストがとらえられて殺された。国民党のはげしいテロは進歩的學生にもものびた。學生の側にたっていた魯迅は退職しなければならなくなった。警察の追手はかれにもせまっていた。1927年10月、かれは上海にいて、それ以後ずっと住みつくことになった。

上海時代の魯迅は、文学と社会活動にすっかりうちこんだ。かれは中国共産党の指導する人民大衆の革命運動で、最も頑強な戦士のひとりになり、マルクス主義思想の影響のもとに、以前の観点をすててプロレタリアートとその党の立場へと移った。魯迅を《組織にはいないコミュニスト》とよんだ毛沢東同志は、魯迅が国民党の反共《討伐》と革命がより一層深まった時代に、中国革命文化のとびぬけた活動家になった、といている。毛沢東同志は、魯迅を党の立場にたった作家として、特徴づけている。

《魯迅は組織のうえではコミュニストではなかったが、かれの思想、行動、作品はマルクス主義化していた……かれは生涯のおわりに、プロレタリアートと民族解放の立場から真理と自由のためにたたかった……》<sup>(1)</sup>

1928年から1930年にわたり、《文学革命から革命文学へ》のスローガンが展開された。中国の革命文学の性質にかんする論争に参加したかれは、マルクス主義の文学芸術論を知悉することになった。ちょうどこの頃、魯迅は《ソヴェト・ロシアの文芸政策》とよばれるイデオロギイの諸問題にかんする全ソ連邦共産党中央委員会の決議、また、プレハーノフとルナチャルスキイの一連の文芸論を中国語に翻訳して出版した。

1930年10月、上海でひそかに集会があり、魯迅を先頭にした《左翼作家連盟》がつくられた。革命文学と進歩的文学者の団結のため、左連の指導を實現しようとして、魯迅は中国共産党の政策をおこなった。党は作家にその作品をもって革命に、人民大衆の反封建・反帝国主義闘争の任務に、つかえることを

(1) 毛沢東、延安における魯迅記念集会での演説、雑誌《7月》1939年、第10号。

よびかけていた。党の指示にこたえた左翼作家がこの計画を実現するにあたっては、魯迅の文学的・社会的活動がおおきい役割をはたした。上海時代の魯迅は中国共産党の地下組織とむすびつき、コミュニスト作家の馮雪<sub>フン</sub>、柔石、唐<sub>トウ</sub>と親しくした。かれの上海の住いは一再ならず国民党の警察におわれるコミュニストの隠れ家にあてられた。魯迅と瞿秋白は文学上のふかい友情によってむすばれた。瞿秋白は中国共産党と労働運動の著名な活動家であり、ロシア文学の翻訳者として知られていた。かれは30年代のはじめ、上海のインテリのなかで党活動をしていた。魯迅は共産党指導のもとの中国人民の勇敢なたたかいはげまされて、倦むことのない緊張した仕事をつづけた。《党は魯迅に力をあたえた》と馮雪<sub>フン</sub>はかいている。

まわりにあつまった有能な文学青年を、魯迅は心棒づよくおしえ、おおくの若い作家に文字をしらせた。殷夫、葉紫、蕭紅そのほかの若い作家の本がでたのは、かれの直接の援助のためである。魯迅はこれらの本に序をかいて、高く評価した。かれは若い人に、おごることなく、人生と創作にたいしては、表面だけをみて軽率にたちむかうことのないよう警告し、貴い実際的な忠告をあたえ、創作上のゆたかな経験をおしみなく分ちあたえた。かれが青年作家にあたえた主な遺訓は、人民につかえ、頑強にねばりづよい仕事をする事、であった。

この時代の魯迅は多くの編集をしている。1928年に雑誌《語絲》の編集をし、(1930年国民党の検閲により禁止された)、おなじ年の6月あたりに《奔流》を先にたってはじめてしたが、1929年12月には、革命的な言論と文字の問題にマルクス主義の論文をのせたため、国民党の禁止するところとなった。魯迅は左翼作家の出版をたすけたが、それはひじょうに積極的だった。かれは左翼の機関誌《萌芽》、《前哨》、《十字街頭》、《海燕》などの主編であった。

上海時代の魯迅は、革命的傾向の青年・学生と関係をたたなかつたのはむろんのこと、かえってそのむすびつきをつよめた。1927年10月に上海へゆくと、その月のうちに、労働大学、暨南大学、大夏、復旦、光華などの大学で、文学と文化史にかんする講演をした。1932年の11月には、しばし北京に滞在した暇

を利用して、各大学で講義した。魯迅は中国青年のよき友でありよき師であった。かれは青年の熱烈な感情、革命的情熱を理解できたので、同じ思想をもつことは容易であった。かれは青年に、革命の信念、祖国と人民への愛情をふきこんだ。

上海時代の魯迅の社会的・政治的活動は、激しくてはりつめたものであった。かれは積極的に各種の民主的・愛国的団体をつくって参加したが、それには、革命互済会（1928年）、自由大同盟（1930年）、民権保証同盟（1933年）がある。魯迅は世界文化の活動家たちの、反ファシズム運動を全面的に支持した。1933年3月、かれは上海のドイツ領事館にいて、ファシズムのテロにたいする抗議書を手渡した。1933年9月、上海で秘密にひらかれた国際反ファシズム会議は魯迅を主席にえらんだ、かれは会議に出席できなかったが、仕事のほうは援助した。

国民党反動は警察の追跡、残酷な検閲により思想的妨害活動をしようとし、作家の逮捕と秘密の殺戮によって中国の革命文学の発展をおさえようとした。魯迅や左連の戦斗的な友人の作品は、禁止本のリストにいれられた。検閲官はおもうとおりに魯迅の政論をけずった。魯迅は警察の追求をのがれねばならなかった。反動はその権力を危くする魯迅を罰しようとした。1930年3月、浙江省の地方国民党機関は国民党中央執行委員会となり、反動的な南京政府は魯迅の逮捕令をだそうとしており、ファシストはかれにたいする悪企みを用意していた。しかし、魯迅の権威と人望は高かったので、全国民の怒りをおそれた国民党は、ついに手をくだせなかった。1931年2月に国民党に銃殺された左翼作家五人の死を、魯迅はふかくかなしんだ。しかし、かれは一刻たりとも戦いの場をすてたことはなかったし、また、絶望や悲観におちたこともなかった。かれは中国文学の革命の力をかたく信じていたのである。

《プロレタリア文学はもっと成長するだろう。なぜならそれは広汎な勤労大衆のものだからである。しかも、それが存在し、きたえられ、おとなになるかぎり、革命的プロレタリア文学も成長するだろう。》

魯迅政論の精華といわれるものは上海時代のものである。この時代の評

論、フェリエトン、演説、小品文は多くの文集、《而已集》(1928年)、《三間集》(1932年)、《二心集》(1932年)、《偽自由書》(1933年)、《南腔北調集》(1934年)、《准風月談》(1934年)、《花邊文学》(1936年)に収められている。魯迅の死後1936年に雑文集が3冊、つまり《且介亭雜文》その他のものが出版された。

魯迅にとって、雑文は革命と人民の利益に用いる、きびしい戦いの武器であった。革命の深刻化と国民党反動の反革命《討伐》という、あたらしい情勢のもとで、魯迅は政治的立場をはっきりさせた。かれは革命的プロレタリアと中国共産党の戦斗的任務を遂行するために雑文をかいたのである。当時の中国で、かれの雑文の影響をうけないものはいなかった。かれはいつでも思想闘争の最前線にいた。魯迅はひろい戦線で攻撃をくりひろげた。すなわち革命をおさえつけようと空しい努力をしている、反革命国民党権力にたいし、日本の中国侵略をたすけ共犯者となっている帝国主義諸国にたいし、《資本主義を攻撃するのは文明にたいする挑戦である》と論ずる反動教授にたいし、ショーヴィニズムを宣伝するファシスト文学者にたいし、攻撃を展開したのである。魯迅は軍閥の罪惡、ブルジョア博愛の偽善、日本帝国主義の満洲侵略開始となった1931年の9・18事件における国民政府の裏切り政策を容赦なくばくろした。かれは黄色刊行物の中傷的非難に反撃し、人民のための民主的自由と婦人解放を要求し、労働者階級の要求と青年学生の革命的活動を支持した。

魯迅は抗日民族統一戦線の結成をとらえた中国共産党のスローガンを最も熱烈に擁護した。かれは侵略者に断乎として反撃するためには、統一戦線の旗のもとに、中国の作家が例外なしに団結すべきことをうったえた。かれはここに中国人、愛国者としての使命をみいだしたのである。

《わたくしは全人民の抗日戦線政策に、全面的に賛成する……しかも文句なくこの戦線に加入する、なぜならわたくしは作家であると同時に中国人であるから。この政策は全く正しい。わたくしはこの戦線に加入し、ペンと作品と翻訳でたたかうつもりである。必要とあらば、ペンのかわりにほかの武器をとることも辞さないであろう。》

魯迅は心の底からソヴェト同盟の友であった。かれはソヴェトで平和のうちに建設のすすんでいる成功ぶりに、じっと眼をそそいだ。かれのことばによると、この成功はかれに勇気と《階級のない社会のあらわれる確信》をおこさせている。かれは軍閥やソヴェト・ロシアに十字軍をおこそうとしている戦争火つけ人のデタラメな中傷をばくろしているが、それには怒りがこもっている。《われわれはもう欺されない》で魯迅は毅然としてこういつている。

《われわれはソヴェト攻撃に反対する。暗黒勢力がいかにかい言葉やさきやき、いかに正義の仮面をかぶろうとも、われわれはかれらのソヴェト攻撃を粉碎せねばならない。これこそわれわれの生きる道である。》

魯迅の政論、小品文、演説、フェリエトンの特徴は、高度の思想性と原則性、短刀直入の意見、風刺的ばくろ、その燃えるような情熱と力にある。瞿秋白は《魯迅雜感選集》の序で、政論家魯迅の主な特徴を四つあげている、第一に生活を直視できるめざめたリアリズム、第二に尖鋭な戦斗精神、第三に自由主義と資本主義にたいする不寛容の精神、第四に虚偽、偽善にたいする不寛容である。これらの特徴によって、魯迅の政論は強力な思想闘争の武器となっている。

魯迅は雑文というジャンルにひじょうにおおきい意義をあたえ、創作として高度の要求をだしている。かれは雑文のうちに、芸術的典型をつくり、成功し、それによって思想をつたえることができた。たとえば《狎》で、それは、たましいを売りわたしたインテリや心に毒をもちながら殊勝な顔付をしている碌でもない者共の典型である。かれらのご主人は《犬の嗅覚にたよっている》雑誌を読まない軍閥や、買弁、外国人である。こういう憐れな犬どもは、ご主人よりずっと危険なことがある。魯迅に社会現象の本質そのものがあばけたのは、芸術の典型化をこのように扱っていたからである。

魯迅の雑文は形式が多様なばかりではない、それを成功させているのは、高度の芸術上の特色があるからで、迫真性ある言語、弾力性ある芸術方法の駆使、それに何よりも比喩、誇張、するどい風刺、ユーモアなどである。

思想性と戦斗的情熱のむすびついた魯迅の手腕によって、その雑文は革



命教育の力づよい方法になっている。残酷な階級闘争のときにつくられたかれの雑文は、敵をにくしみ、革命の勝利のためたたかうことを教えている。魯迅の雑文のなかでおおきい地位をしめしているのが、文学批評である。革命文学と左連の活動にかんして論争のおこなわれた時代に、魯迅は革命的な中国文学の理論的基礎の仕事をし、まもりとおした。社会主義リアリズムの原則を肯定したかれは、《純粹芸術》の礼讃者の《新月社》、国民党反動におされた《民族主義文学》のショーヴィニストのスローガンに反対し、文学に儒教の教えをつぎこもうとした、あたらしい古典主義者をあざわらった。反動的なブルジョア思想の影響をうけた思潮と理論をもつ、異質の革命文学とのたたかいで、魯迅は思想上の敵とは妥協しなかった。

左連が結成されて活動した時代に、ある批評家や作家たちには、プロレタリア文学の仲間入りをするためには、プロレタリアについて書きさえすればよい、という誤った考えがあった。魯迅は、ほんとうの革命家のみが、革命的なプロレタリア作家になれるとみなし、プロレタリア文学を俗悪に理解することに断乎として反対した。かれは、生活とのむすびつき革命運動とのむすびつきをつよめることが、革命文学者のいちばん大切な任務のひとつとみなした。

《革命文学者は——と魯迅は書いている——革命と生活をともにし……革命の脈膊をつよく感じていなければならない。》

かれは生活を創作のただひとつの源となした、それゆえ、わかい作家にかれがもとめたものは、ほうとうの作品をえらぶスローガン、各階級の生活の全面的な研究、味方ばかりでなく敵をすることであり、それではじめて敵と効果的にたたかえる。魯迅はうむことなく、動揺するブルジョア作家を批判した、かれらは、言葉のうえでは革命文学に加っていると宣言するが、はじめて危険にさらされると、後退りしてしまふ。小ブルジョア作家のこの動揺を、魯迅は《でんぐり返り》と、うまいことをいっている。

文学の問題にかんする評論で、魯迅は作家を読者大衆に近づけるためにたたかい、文学言語の純潔のために、古い形式を利用するばあい、俗悪な理解と

たたかった。かれがたいへん熱心に口碑・伝説に注意したのも、人民大衆の芸術的才能の表現をそのなかにみていたからである。

革命的な中国文学の基本的原則にかんする仕事は、魯迅にかかわるもので、それをかれは先進的プロレタリア世界観の立場からたたかいとり、左連時代の文学運動の実践に、社会主義リアリズムの原則をうちたてようとした。

上海時代の魯迅は、主として雑文、翻訳、社会的活動、青年作家の仕事のために時間をとられたが、小説の創作もすてなかった。1934年から1935年にかけて、風刺作品を5篇かいたが、それらは、以前の3篇とともに《故事新編》(1936年)におさめられた。これらの小説は神話伝説を題材にしたにはちがいないが、ふつうの歴史小説とはことなる。これは、伝統的な考えを芸術的に改作したものであるが、現代の否定的現象を批判し、あたらしい思想の表現に利用するためであった。それとともに、かれは基本的な題材を勝手にゆがめず、歴史的事実(たとえば、墨子にかんする挿話)や、神話伝説の伝統的解釈には、忠実であった(たとえば、老子が函谷関へ去ったことや羿の弓にかんする話)。魯迅の風刺小説のこうしたテーマと構成上の特徴は、作者が暗黒勢力とたたかうために用いる、あたらしい形式の文学の武器になった。

《魯迅のこの方法は——と茅盾はかいている——かれを研究し、その方法をわがものにしようとしている人びとの心をひきつける。しかし、むかしのできごとを説明するために、現代の見解を、どんなぐあいにつかったか、ということだけを学ぼうとするのはむずかしい。かれのもっと深刻な意図、つまり、にくむべきものをにくみ、愛すべきものを愛すことを同時代の人にふきこみ、そうすることで、古代と現代をむすびつけ編みなおすために、故事を借用することに関していえば、われわれはそれを理解し楽しめるが、この方法をわがものにすることはできない。<sup>(1)</sup>》

《故事新編》のうち、とくに1934年から1935年のものは、ひじょうに現代性と風刺の鋭さがつよいので、その出版後、魯迅は古代英雄の形象に同時代の人びとの誰かを描いたのではないか、とうたがいはじめる新聞もあった。魯

(1) 孫易熙の論文を引用して、魯迅小説の特色《新華月報》、第1号、1954年、235頁

迅は《出関》について》で、具体的なモデルを再現しようとしたのではなく、典型的に集中した形象をつくろうとした、ととくにことわっている。

《出関》と《起死》（これはドラマの形式をとっている）で、魯迅の風刺は、作者と同じ時代の人びとがまもり、そして宣伝しさえしようとした、道教の教えのばくろにむけられていた。魯迅は、ここで現実をのがれかくれようとする老子の失敗、生活にふれると普遍性をうしなってしまう荘子の抽象的思想の失敗を、納得のゆくようにしめしている。魯迅は《出関》で、文学によって得をしようとしか考えていない連中を嘲笑している。消極的抵抗としての、逃避が無益なことは、《わらび採り》で、はっきりしめされている。かれはここで、高等な紳士の丙君の芸術のための芸術のあわれむべき同調者の失敗をあざわらっている。《奔月》では、卑劣で嫉妬ぶかく、恩しらずの者どもが、ばくろされている。

《故事新編》におさめられている、初期の作品と、1934年から1935年へかけての作品、とくに《非攻》、《理水》とを対照してみると、その社会的意義の成長ぶりがわかるであろう。

《理水》は、禹が洪水を治めたという、むかしからの言い伝えを述べているだけにはとどまらない。これは人民の要求には鼻もひらかけない、ひとりよがりな愚かな国民党の官僚にたいする、仮借ない風刺である。かれらにできるのは視察だけで、おべっかものにすぎない。藻のたぐいや木の皮をたべている人民は、まったく生活が保証されている、とかれらは嘲るように公言してはばからない。魯迅は、破壊的な洪水にみまわれた中国を救うことのできない、無力な国民党権力を、ほのめかしている。ここではまた、文化山に住む《学者たち》の偽善も揶揄されている。かれらは人民とはちがい、食う心配がなく、食糧は飛行機で外国からはこばれる。それで心配なく《学問》を研究し、スコラチックな論争にふけっていられるのだ。しかし、人民につかえるという貴い精神をもとにした将来のあたらしい人間関係を主張するために、魯迅は古代の形象も用いている。そのため、魯迅は積極的な人物に注意をむけている。《鑄劍》の主人公眉間尺の行いをみちびくものは、善と正義のため悪に報復する不屈

の決意である。《理水》で官僚やエセ学者に対比されているのが禹で、かれは3年も家を留守にして、中国の洪水をおさめた人である。魯迅は禹に、目的を実現するための勇気と不屈不撓の精神、かれがつねにその意見に耳をかたむけた、人民の利益にたいする忠実さ、といった特徴を肉づけしている。天災には手をこまねいている官僚とはちがって、禹は旧習にひきずられず、洪水を征服するあたらしい方法を応用して、その目的を達したのである。《非攻》の主人公墨子は、楚が宋に攻めこむのを未然にふせいだ。それは平和をまもるために、人民の利益をおもんばかってのことである。魯迅が墨子に反侵略斗争の樂觀的精神をあたえているのは、歴史的事実と完全に一致しており、時代の要請にこたえている。魯迅はこの作品を、中国の民主主義諸勢力が抗日運動を展開した時代にかいたのであった。

《故事新編》は、魯迅がいかにあらゆる言語の方法を、弾力性をもってわがものとなし、おおきい芸術的効果をあげたか、ということの、かがやかしい模範のひとつである。小説の主題が、古代の措辞、文言をひろくとりいれねばならないこと、むかしの著作（《道德經》、《莊子》）からの引用のあることを示唆している。それとともに魯迅は現代の話言葉も、積極的にもちいている。古典の書物や哲学思想、たとえば《言葉でいえるような道は、永遠の道ではない》とならんで《大学》、《幼稚園》、《飛行機》、《ビタミンB》、それに《理水》の《学者》が《O, K!》、《How do you do?》と叫ぶなど、当時の中国の新語もみあたるのである。このように、各層の言葉がまじって、独特で現実ばなれの滑稽じみた異様なさまを呈しているのは、魯迅の手法のひとつであって、風刺小説ばかりでなく、雑文でもしばしばもちいるところである。

魯迅が晩年プロレタリアの世界観の立場からおこなった、革命的芸術をまもる戦いは、かれの創作方法、何よりもまず積極的主人公の形象使用に影響をうけていることは疑いない。中国の評論家はこれを、魯迅が創作実践において社会主義リアリズムの方法を身につけるようになったと評価している。

ロシア古典文学とソヴェト文学を熱をこめて宣伝した魯迅は、生涯の最後の10年とくに積極的に、ロシア・ソヴェト作家の作品を翻訳した。かれが訳し

たものには、ゴーゴリの《死せる魂》と《鼻》チェホフの短篇、ゴーリキイの《ロシヤの物語》サルティコフ・シチュードリンの《ある町の歴史》の一部、ファジェーエフの《壊滅》、ヤコブレエフの《10月》がある。魯迅はソヴェトのおおくの本の中国語訳出版を全面的にたすけ、それらを編集しさらに序をかいた。ブロックの《20》、ショーロホフの《静かなドン》、セラフィモヴィチの《鉄の流れ》、グラドコフの《セメント》、イワノフの《装甲列車14—69》、ルナチャルスキイの《解放されたドン・キホーテ》そのほかの、序とあとがきはかれのものである。かれはソヴェト作家の《ハープ》と《一日の仕事》の作品集に序をかき、校訂、編集して出版した。このなかには柔石、曹靖華そのほかの人びとの訳したフェーディン、セラフィモヴィチ、セイフリン、リャシコー、ショーロホフ、フルマーノフ、マルイシキン、カターエフの作品がふくまれている。

ソヴェト文学の偉大な友魯迅は、生涯の最後の日まで、ソヴェト文学を中国に普及することに心をくいだいた。1936年かれはゴーリキイの作品のふくまれている、瞿秋白の翻訳集を校訂して出版した。死ぬ3日前の10月16日に、かれは《ソヴェト作家7人集》の序をかき、かれがひじょうに高くかっていたこの本の訳者曹靖華に手紙をしたためた。

魯迅はソヴェト文学の発展を注意ぶかくみまもり、その成功をよろこび、それを中国の読者にできるだけしらせようとして、あらゆる努力をおしまなかった。ソヴェト文学に魯迅がみたものは、未来の文学であった。魯迅の火のような活躍とかれと功を分ちあっている人びとのおかげで、ロシヤ古典文学とソヴェト文学は《奔流》となって中国に流れこみはじめた。

すでに1925年魯迅の組織した《未名社》のまわりには、有能な翻訳家の曹靖華、葦素園があつまり、実際上の指導に李霽野があたっていた。かれらはロシヤ古典とソヴェト作家、それに西欧の進歩的作家のおおくのを、中国に紹介した。1934年9月、魯迅のつくった雑誌《訳文》の創刊号ができた。この雑誌にのった外国作家の翻訳のなかでは、ロシヤ・ソヴェト作家が重要な地位をしめていた。《訳文》は世界の進歩的文学を中国にひろめるといふ、おおき

な役割をはたした。魯迅とかれをたすけて功をなしとげた人びとは、中国の読者に、ロシア古典文学とソヴェト文学をしらせるという高潔な事業を、狂暴な検閲と警察の追求のもとでやらねばならなかった。魯迅は国民党権力が革命的内容のものはもちろん《表紙に赤文字のある本でさえ》禁止したの悲しみと憤りでのべている。

魯迅は、社会主義リアリズムの偉大な創始者ゴーリキイの作品を高く評価し、《あたらしいロシアの偉大な芸術家》をみていた。かれはゴーリキイの作品、とくに中国の労農大衆と中国の革命文学の発展のために、1929年中国語に翻訳された《母》の意義に注意した。かれはかいている。

《ゴーリキイは生きていたあいだ、各方面から尊敬をうけ、死んだあとも尊崇されている……その理由は、かれの生涯が人民大衆としっかりとむすびついており、かれの愛と憎しみ、悲しみと喜びが、人民の愛と憎しみ、悲しみと喜びであったからである……》

魯迅はよく《中国のゴーリキイ》といわれる。この比較にはほんとに深刻な意味がある。ゴーリキイとおなじように、魯迅はふるい社会環境のなかでこの社会のおわりと光りある将来の生れでること、その社会の主人公が人民であることをみてとった。魯迅のヒューマニズムはゴーリキイのヒューマニズムにちかい。魯迅の評論はゴーリキイの評論のように、人民にたいする愛情と敵にたいする非妥協でつらぬかれている。魯迅は中国ではじめて、プロレタリア文学の旗をかかげたひとであった。晩年の魯迅がゆるぎなく社会主義リアリズムの立場にたっていたことには、ソヴェト文学の作品の影響がひじようにつよく決定的といってよい。

おもい病いとはげしい労働のために、かれの健康はそこなわれた。1936年10月19日、偉大な中国人民の作家はなくなった。この損失は、中国のひとりひとりの愛国者の胸に、はげしいうずきをあたえた。全中国が魯迅をうやまい記念した。中国人民はこの傑出した作家、革命家のすがたを心に深くとどめている。かれの作品にある大いなる真理は、かれのあとにつづく中国文学者の模範となった。

魯迅のたたかひの伝統は、日本の侵略と蔣介石反動派に反対する、民族解放戦争時代の進歩的中國作家にとっては旗であり、創作の指導であった。今日の中國作家たちは、魯迅の新中国文学に確立したリアリズムの方法を、発展させ豊富にしている。魯迅の作品は自由な人民中國では、何百万という読者大衆の財産となった。不滅のエネルギー、炯眼で遠くまでみえる智慧、ひろい知識と善良な心をもったひと魯迅の名は、祖国と人民にたいする献身の模範となって、現代中國作家たちをはげましている。